

## 児童自立支援施設の小学生に対する心理教育的アプローチの実践と効果

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
飯塚 梓

児童自立支援施設(以下、自立施設)は、児童福祉法に規定された福祉施設である。近年、被虐待経験を持つ児童が 65.9%、発達障害等の障害を抱える児童は 35.4%入所しており、このような報告から、施設では心理的な援助が必要とされている。福祉現場や自立施設では、集団に対して心理教育的なアプローチが行われているが、施設の取り組みを報告している論文は数少ない。そこで、自立施設 A 学園で心理士が実施する「グループワーク(以下 GW)」の実践に参加し調査を行った。本研究では、二つの目的を持って研究を進めた。一つ目は GW の効果を考察し、生徒にどのような影響を与え変化を促したかを明らかにすること、二つ目は GW の実践の様子を報告し、自立施設で GW を実施する意義と今後の課題を明らかにすることであった。

調査対象者は、小学生 8 名、職員 7 名であった。生徒と寮職員に対して、GW の実施前後でプレテスト、ポストテストを行った。評定尺度として、P-F スタディ、小学生用攻撃性質問紙(HAQ-C)、小学生社会的スキル尺度、CBCL を使用した。GW は 8 回実施され、毎回 GW が正確に行われているか調査するために、GW の理解度を 4 件法で尋ねた。GW 実施後、生活場面での変化を調べるために、職員に個別インタビューを行った。

質問紙では GW の前後で以下の結果が得られた。第一に、攻撃では、敵意と身体的行動の減少に効果があった。第二に、向社会的スキルが増加し、引っ込み思案行動が減少した。このことから生徒達が自信を持って行動するようになったと考えられた。第三に、アグレッションの型の変化から、自分を守るための主張性が高くなった。この結果は、GW で行ったワークの内容が影響していることが考えられた。

インタビューの内容は、川喜田(1970)の KJ 法を参考に、得られたテキストのグループ編成を行った。その結果、生徒に関しては、GW が影響している発言や行動が見られる事が明らかとなった。職員に関しては、GW の内容が指導に活かされていること、職員同士の情報共有、連携が進んだこと等が明らかとなった。振り返りシートの結果から、生徒が理解出来ていないワークの内容が挙げられ、今後のプログラムやワークの内容を見直す必要があることが考えられた。

本研究の課題として、GW 外の要因の影響や GW の効果を調査する方法が挙げられた。今後、調査の方法を見直して研究を進めて行く必要がある。自立施設では、安定した生活をする事が重要であり、心理的な取り組みはその上で行われるべきである。しかしながら、GW を実施したことで得られた効果や影響は大きいと言える。今後も、自立施設の特色を生かし、新しい取り組みを行っていくことが望まれる。